

聖ホセマリアの生涯 －21

貧しい生活に苦しんでいたエスクリバー家に相続財産が入ってきました。しかし、ホセマリアはそれを神からの使命のために使わせほしいと頼みます。

2023/09/12

[過去の記事はこちらから](#)

聖ホセマリアの仕事の一つは聖イサベル修道院のシスターたちの霊的な世話でした。ある日、ミサの中でご

聖体を配っているとき、心の中で
「神様、私はこの人たちよりあなた
を愛します」と言いましたが、その
とき「行いが愛であって、甘い言葉
が愛ではない」という声を心で聞き
ました。これは『道』の933番に
載っている逸話です。

オプス・デイのために働くことができ
る青年に堅固な養成を与えるため
適切な場所を探していましたが、と
うとう1933年の年末、アパートの一
角に家を借りて「法律と建築」と名
付けた予備校を立ち上げました。そ
こでは法律と建築の授業をする他
に、講演会などの文化的活動や宗教
的な教育活動が行われました。しか
し、もともとこの場所も小さなもの
で、すぐに手狭になりました。ホセ
マリア神父は再び大胆な計画を考え
るようになりました。ヨーロッパの
町では多くの人はいアパートに住ん
でいます。アパートの中の複数の家や
階を買い取り、工事をしてそれらを

繋いで一つにすることも可能です。
このようにして予備校と学生寮を一
緒にした施設を作ろうと考えたので
した。しかし、もちろんそれにはか
なりの額のお金が必要です。

ちょうどこのころ神父の父方のおじ
さんが亡くなりました。その方は司
祭で子供がなかったので、相続財産
がホセマリア一家にも入ってきまし
た。しかし、それは家族みんなの財
産です。神父は深く考えた末、この
学生寮建設のためにこの財産を使わ
せて欲しいと家族に頼むことにしま
した。しかし、そのためには家族に
その理由を話さねばなりません。

家族は父親が破産してから故郷のバ
ルバストロを去り、ログローニョ
（ここで父が亡くなる）、サラゴ
サ、マドリードと引っ越しを繰り返
してきました。その間、つねに貧し
さに苦しみ、マドリードに来てから
は経済問題は深刻の度を増していま

した。母と姉は、大黒柱のホセマリアが収入の多い仕事を探すことなく、青年の指導や病人や貧しい人たちの世話に一生懸命なのを見て、不思議に思っていました。「なぜ私たちはマドリードにいるのでしょうか。こんなに苦しい生活は初めてです」と母は時にはホセマリアに抗議しました。しかし、息子の口から納得のいく答えは出てきませんでした。

ついに、その秘密を明かすときが来ました。母と姉と弟にオプス・デイという使命を神から与えられたことを告げ、そのために遺産を使わして欲しいと頼んだのです。

尾崎明夫